



A window of a poem

# ポエムの窓

解説・高安ミツ子

## 一枚のレコード

樋口富士枝

ラジオからチャイコフスキーの『悲愴』の曲が流れてきた  
ふと半世紀前の時が甦つた

トイレと台所が共同の四畳半  
そんな一間から始まつた新生活  
夫が一番先に買つてきただのは  
レコードプレイヤーと一枚のレコード盤  
明かりに透かすと美しいピンク色に  
それが『悲愴』だつた  
見知らぬ土地で心細いおもいを重ねながら  
飽きもせず  
毎日毎日聞くうちに

仕事の都合や家族が増えたことで  
何度も引越しをしながら

喜怒哀楽の時を過ごし  
半世紀あまりが過ぎ  
又二人になり  
そして一人になつた

生活や環境は  
驚くような速さで様変わりし  
便利になり物があふれる今  
失つた物の計り知れないことに  
人々は気づき始めていた

この先も失うものは  
得るものより遙かに大切な物ではと  
そんなことを思いながら  
流れくる『悲愴』の曲が時を繋ぐ

詩集「つぶやき」より

今回紹介する詩人樋口富士枝さんは、岐阜県のお生まれで現在千葉市に在住されています。

読書好きであった樋口さんは七十歳を過ぎてから詩を書き始めました。子育てや家族としての責任から解放された時から詩作への道を歩み始めたのですが、日々の絶え間ない努力を経て今年の六月、第一詩集「つぶやき」を刊行されました。

年齢的に見て、確かに詩を書くスタートは遅かったかもしれません。しかし、それまでの作者の人生が裏打ちされた作品群は街のない実像が吹き込まれています。作品は作者の生活を掬い上げその思いを負いのない言葉で表現しています。ですから、その情景は読み手に直接語りかけてきます。

作品「一枚のレコード」は新婚生活が始まって間もなく、夫が買つてきたレコードがテーマとなっています。作者の生活に溶け込んだレコードは変わりゆく自らの人生に常に寄り添つていた風景が蘇ります。若い生活の中で求めた一枚のレコードから二人の生き方を暗示しているように思えます。

二連では、不便さと窮屈さから始まつた新婚生活には物質的豊かさは感じられませんが、不満はありません。夫婦で共に新生活を作り上げようとする清々しさを感じます。見知らぬ土地での不安な生活は、おそらくレコードを聞くことで心の安定を保ちながら家庭を作り上げていったと推察できます。レコード曲はチャイコフスキーの「悲愴」でした。

三連では時間の経過を感じられます。増えた家族を支えながら、家族の喜怒哀楽を必

死で受け止め走り続けました。やがて、立ち止まつて眺めた風景は心が削がれた思いになる、たつた一人だけの寂しい風景でした。

四連以降では現代の生活は便利になり物があふれ、幸せなはずなのに、作者は失つてしまつたものへの郷愁が沸いてきます。物や便利さでは拭えないものがあることを作者は感じているのです。一枚のレコードを買った時代は貧しくても精神の豊かさがあつたように思えるからでしょう。「悲愴」を聞くたびに共に暮らした時間が郷愁となるて思い出されるのでしよう。樋口さんの作品には日常使いの工芸品に触るような懐かしさと健全さが感じられます。気取りのない、技巧を取り扱った無心の手仕事を生まれた作品だといえましょう。終連の作者が感じている時間的郷愁とは何だろうと考えました。

新型コロナウィルス感染症の蔓延で人類は今までにない苦しい問題に直面しています。疫病や災害に見舞われる度に人類は大きな悲しみを背負って乗り越えてきた歴史があります。その結果、人や社会にも変化が生まれ時代は進んできたのでしょう。また、それに準じて個人の意識も何が大切であるかの考えが生まれ変化していくのではないかと思えます。

戦後、生活は欧米の合理的な考え方押し付けきました。勿論その良さはありますけれど、個人としての幸せを考える場合長く続いている日本の文化との融合の大切さを再確認する時期に来ていました。作者は感じているのではありません。

